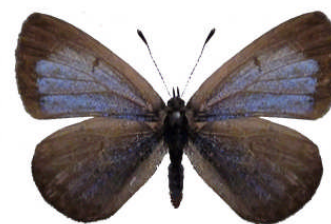


学名 *Celastrina sugitani* の *sugitani* は日本のチョウ研究家として功績大の杉谷岩彦教授にささげられたもので、本種との初の出会いは 1966 年京都の貴船である。ちょうどギフチョウの発生時期と重なっていて、鞍馬の竜王岳でギフチョウとの出会いを楽しんだ後、貴船へと山越えをして会いにいったもの。大学 3 回生となって理学部化学科に配属が決定した春で、貴船は 1968 年にも訪れているが、京都にいた間になぜかルーミスジミがまだいた奈良春日山へと出向かないままだったことが悔やまれる。



Apr. 13, 1966 京都貴船 ♂

今でこそ本種の幼虫がトチノキだけでなくミズキやキハダの花蕾を食べて育つことが明らかとなっているが、当時はトチノキのある溪流沿いにゆけば会えるチョウと信じていた。1978 年に兵庫に移ってから、そのトチノキがある音水溪谷を訪れて期待通り本種に会えたが、2010 年に再訪問したときには見る事ができていなく、どの生息地でも個体数は多くはないと思われる。



May 2, 1999 兵庫音水溪谷 ♀

2012 年の 5 月、白馬南二股のカタクリが咲く林道へと入った際、湿り気のある路面で吸水する本種のみに出会えたが、撮影目的で近づく当方の気配にはとても敏感で、次々と場所を変える。それでも遠く飛び去ることはなく、5m 四方でいどの範囲から出ることはなく、独特の濃いブルー翅表は一度も見せてくれないまま吸水し続けていた。その美しい翅表を 1 匹だけ捕獲して標本化したので示しておく。



May 7, 2012 長野白馬南二股

なお、この白馬地区はイエローバンドという美しいタイプのギフチョウが生息していることで有名なところで、実はこの日も林道進行方向 10m ほど先の路傍に咲くスミレの花で吸蜜中のギフチョウに気づき、急ぎ望遠モードでビデオカメラを ON として接近していったのだが、ギフチョウがスミレにいたのは数秒という短さで、さらに前方へと飛び去ってゆくのを見送るしかなかった。



この個体がイエローバンド・タイプであったかどうかは全く分からず、かろうじてスミレの花で吸蜜中のギフチョウの姿を捉えた撮影記録を残しておく。まるで判じ物の画像だが、中心部をよくみれば、羽を広げたギフチョウが確認できる。スギタニルリシジミの項になぜギフチョウなんだ、と批判を浴びそうだが、同じ観察日の忘れられない記録なのであえて追記した。